【八朔巡礼物語り】

第2話 八朔が教えてくれた点と線

尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長
写真家 村上宏治

背景に見えてきた いにしえ人の人間ドラマ

撮影取材の一つ一つの事柄を、いわば点と点を結ぶようにして結合することで、一つの柑橘という視点だけでは見えなかった、いにしえ人の全体像が見えてくるのです。必ず出来事にはその背景に、人と時間と歴史と浪漫が介在しているのです。

八朔の産地として、まずはその名が挙がるのは尾道市因島と、紀州は紀の川。その両者の間には長い時間軸が静かに眠ります。米の荘園地として栄えた世羅の米は、尾道に一度集積され、紀の川を経由して高野山へと運ばれました。尾道と紀州の繋がりの始まりは八百五十年も時を遡ります。

そして時は過ぎ四百年程遡る、第一次木津川口の戦いは、一五七六年に毛利勢と織田勢との間に起こった海戦です。その戦に村上海賊と、紀の川の鉄砲集団・雑賀衆が毛利方となり参戦、勝利します。一五八九年に村上海賊は、瀬戸内海を自由に航行できる「過所船旗」を、雑賀衆に発行します。一五九六年、因島は村上海賊たちの島。古文書には九年母を植栽し生産に励むようにとの記録が残っています。

村上海賊の使用していた「過所船旗」右側の文字列に「紀州雑賀」の文字が読み取れます

九年母とザボンの原産地は、ジャワ島を中心とした東南アジア。一四〇〇年代には村上海賊は東南アジアとの交易を開始していました。その九年母とザボンから生まれた柑橘が八朔。時は明治、その優位性をアメリカの植物学者が認め後に、密厳浄土寺・住職によって八朔と命名。

その後、紀州・紀の川へと八朔は植栽されていきます。

明治二十年、和歌山県有田の蜜柑農家四男であった上山英一郎（後のキンチョー創始者）が、福沢諭吉の紹介で手にした除虫菊の栽培を因島に託します。

因島には、小さな二つの島からなる八重子島があります。御鳥喰神事「八重子祭」が奉納されます。御鳥喰神事は熊野十二神を祀る神事で、神の使者であるカラスを祀ります。元は、熊野十二神を祀る事から、導きの神として信仰される、三本足のカラス「八咫烏」であります。八咫烏は熊野のシンボル、熊野那智大社・熊野本宮大社・熊野速玉大社の熊野三山に祭られ、日本サッカー協会のシンボルマークにもなっているこのカラス。この珍しい御鳥喰神事は紀伊半島・熊野との関係性を強く意味づけを感じます。まずはこの歴史的史実を並べるだけでも、何か感ずるものが生まれてくることも、危険な想像ではないようにも思うのです。

除虫菊の咲き誇る因島。かつては島中が花で覆われるほど栽培がされていたと記録に残ります。

近年の研究者の方たちによるゲノム解析によって、親品種が判明しました。

八重子島（因島大浜町）。年に数回だけある、潮位がマイナスになる程の大潮の時、八重子島は陸続きになります。

八朔の母樹「八朔55号（調査番号No.55）」（2022年1月時）
広島県立総合技術研究所農業技術センター果樹研究部
東広島市安芸津町三津2835

昭和三十年～昭和四十年頃、ウイルス性の萎縮病に感染した事で、大打撃を受けた和歌山の八朔農家に、因島から八朔の母樹「八朔No.五五」の苗木が渡っていきます。幾度も訪れた樹々の病気にも、因島・紀の川がお互いに協力し合い、その難を乗り越えていきました。

一六〇〇年代に入ると、因島村上と雑賀衆の一部は、小早川隆景と共に九州方面へと向かいます。その主要な地には必ず九年母があり、九年母からまた新しい柑橘が生まれています。

毛利一族そして小早川隆景は、戦国武将としては珍しく、女性と子供をとても大切にしたと記録に残ります。家臣や領地の民達の健康についても、強い意識を持っていました。柑橘の意味を重んじ、戦国時代から幕末維新その後に至るまで柑橘を大切に育ててきていました。その結果、船乗り達が怖がった壊血病も、九年母など柑橘を食する事で回避ができたのです。柑橘の重要性・・・それはビタミン補給だったのです。そして一八六六年には、英国艦隊が秘かに山口県防府市に来日、キング提督を長州毛利家が招いた時の献立に九年母と温州蜜柑が出されたと、『日英饗応料理』の古文書に記録が残ります。

そのもてなしの際、通訳を通じて毛利家代々に伝わる薬であることを伝えています。柑橘は今でいうところの漢方であり、薬膳であり、健康飲料であり、サプリメントだったのでしょう。

毛利元就の三男・小早川隆景。瀬戸内海の覇者・村上海賊と手を組み、瀬戸内海の制海権を握った智将。三原城城主。

因島で生まれた八朔。次号は、この八朔に人生をかけた「八朔の父」とまで言われた、田中清兵衛氏と島の人の奮闘記に進んでいきます。